大人が絵本を
第32回　ことば遊び

司書・読書アドバイザー　安藤　宣子※
小児歯科医師　濱野　良彦※※
※ 絵本と図鑑の親子ライブラリー　ビブリオキッズ（福岡市）
※※ 医療法人元気が湧く　理事ファウンダー

ことばはシャワーのように

親子ライブラリーで、よくある質問のひとつに、「ことばを覚える絵本はありますか」とのお尋ねがあります。1歳半を過ぎても、なかなかことばを発しないわが子の、初語や発語の支援をしたい親心で、親御さんにとっては深刻な悩みです。幼稚園児以上に向けたことばの学習参考書に、「ことばじてん」の類は豊富にあります。しかし、1歳の小さな子どもたちに、ことばは学ばせるものでなく、日常生活の中で自然と身に付けていくものなのです。ですから、答えはいつも一定で、「『ことばを覚える絵本』という特定のものでなくて、絵本が日常の中にあって、繰り返し読みあうことでことばは自然と身に付いていくものです」との助言を繰り返しています。

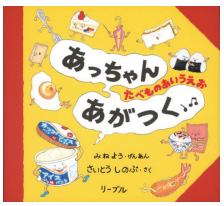
『はじめて学ぶ日本の絵本史Ⅲ』では「『ことば絵本』の新傾向」について、「幼児のことばの発達を促すために、また文字を覚えさせるために作られていた『ことばの絵本』も、70年代になると、作者は対象年齢を限定せず、独自の発想で自由に楽しみながら制作し、読者もまた『何歳向き』ということばに囚われず、自由に絵本を楽しむようになった」[1]と解説しています。何よりも、ことばを覚えさせる目的で読むのでは、子どもに絵本の楽しさは伝わりません。

お母様の胎内にいるときから、たくさん語りかけ、絵本を読み語り、誕生してからも絵本の楽しいリズムのことばを毎日毎日、シャワーのように浴びせてあげていたら、12か月も経った頃には、そのことばの数々がお子様の栄養となって身についているものなのです。要は、改まって取り入れる「絵本」でなく、食事や睡眠、空気や水のように、日常生活の一部となっていることです。そんなアドバイスを行った後、深刻に相談されている親御さんの「蜘蛛の糸」になれる安心材料の「あいうえお絵本」を紹介しています。

あいうえお…わをん！

「あいうえお絵本」も、ことば遊び絵本の一種で、1972年発行の『あいうえおのほん』（まついのりこ作）に代表されるように、あいうえお各段の文字から始まる折句（おりく）をあ行からわ行まで集めて、折句と挿絵で構成された絵本です。『あっちゃん あがつく たべもの あいうえお』（さいとう しのぶ作）は、五十音順に始まる食べものの名前を絵と共に表しているので、「あいうえお」だけでなく、食べものの認識絵本にもなります。

『あっちゃん　あがつくたべもの　あいうえお』
さいとう しのぶ 作　峯　陽 原案
（リーブル）



また、『あいうえおおきな だいふくだ』（垂石眞子作）は、「あんこがたっぷり おおきなだいふく、いきなり どーんと もりのなか」[2]から始まる、ストーリーを持った絵本です。単にあいうえおの折句を配列しただけではないことが特徴で、「んーっ！ほんとに あんこがたっぷり」[2]（○印は筆者）までの五十音を、韻を踏んだ楽しいリズムのあることばで、動物たちと大きな大福が繰り広げる愉快な絵と共に展開されているので、1歳くらいから楽しめる「あいうえお絵本」です。

絵本は本当に素晴らしい逸材です。絵本を様々な角度から見つめるたび、深めるたびに、何回となく

手にするときは！
絵本の魅力 その2

企画　濱野　良彦
構成　木須　信生※※※
※※※ 絵本と図鑑の親子ライブラリー　ビブリオキッズ（福岡市）

「絵本の力」に感嘆させられるのです。

天下のことば遊び「なぞなぞ」

しりとりと並んで子どもたちが大好きなことば遊びはなぞなぞで、幼稚園児にも小学生にも気軽に楽しまれています。なぞなぞは、昔は大人の遊びで、形を変えながらも平安時代から親しまれ、身分の高い教養のある人たちが楽しむものでしたが、明治・大正時代になって子ども向けの雑誌で紹介されると、子どもでもひと言で答えられるなぞなぞは、大人気の遊びになったのです[3]。

ことばを覚えはじめ、ことばに興味を持ち始める小さな子どもに向けたなぞなぞ絵本は、中川＆山脇姉妹の『なぞなぞえほん』になります。なぞなぞ遊びの入門書といえ、「とんち」のようなひねりはなく、子どもが朝起きてから、夜寝るまでの一日に体験することがらや身の回りで目にする物が答えになっています。「あさおきたら まずいくところ」「ねるまえにも いくところ」「いきたくなったら がまんしないで いくところ」[4]のなぞなぞで遊びながら、トイレ習慣などの生活体験を身につけることができる優れた絵本です。

『なぞなぞえほん』
中川 李枝子 作
山脇 百合子 絵
（金の星社）

幼稚園くらいになると、『なぞなぞあそびえほん』（角野栄子作）が楽しいでしょう。「りょうてで つくる さんかくやま、くろいマントきて どかっと すわってる」[5]。大人には、このことばだけで答えがわかりますが、子どもたちは一生懸命、想像力を働かせなければなりません。でも、大丈夫です。この絵本には、答えとなる物が長谷川義史氏の絵でユーモアたっぷりに描かれていて、子どもたちはなぞなぞのことばと絵を補完しあいながら、答えを導き出すことができるのです。

なぞなぞ絵本で頭の体操

なぞなぞも、しりとりと同じように、子どもの発達段階に応じた絵本がそれぞれあります。ことば遊びの達人と紹介しました石津ちひろ氏の『なぞなぞのみせ』は小学生向けで、子どもたちの身の回りにあるものが文房具屋、八百屋、本屋などの店別に分けられて、それぞれの店の絵をヒントに、なぞなぞに答えていくしかけで、難度もあがります。お店ごとのなぞなぞのヒントは絵の中に隠されているので、店内をじっくり観察するのも楽しみのひとつです。

石津氏は「『ことば』にこだわった絵本の文作家で、なぞなぞやことば遊びをテーマにした作品を書いていて、言葉の世界に広がりをみせている」と言われています[6]。発表される新作は常に新たな工夫が施され、ことば遊び絵本を深化させていることも注目のひとつです。そのようなことを知って、何気なく手に取ったしりとり絵本やなぞなぞ絵本の作者名を見ると、石津ちひろ氏であることの多さに気付くことでしょう。

小学校中学年から高学年になると『なぞなぞおめでとう』（石津ちひろ作）へステップアップできます。「ひかりかがやく あかるいほうき、とおくのそらをとんでいる」[7]の答え「彗星」や、「空気」「渦巻き」など自然科学がテーマとなっていて、この時期の子ど

もたちの好奇心や知識欲をどんどんくすぐってくれるなぞなぞばかりです。大人の皆様がチャレンジすると、さて、何問正解するでしょうか。なぞなぞは、年齢と共に硬くなった思考を柔軟にしてくれる頭の体操です。診療中の小学生と、絵本になぞなぞを出題してもらって、子どもと大人、どちらの脳が柔らかいか競争などして楽しんでみませんか。

子どもたちはなぞなぞに答えるのも好きですが、出題する側に立つことも好きです。なぞなぞ絵本を使って、子ども同士の遊びも良いですし、子どもから大人へ、大人から子どもへのコミュニケーションツールとして、大いに楽しんで知識を増やして下さい。なぞなぞは、語彙力だけでなく、考える力を鍛え養う遊びでもあるのです。

快文の時間：回文絵本

「だんながなんだ」「だんなキスがスキなんだ」「だんなしぶいぶしなんだ」。これらは、宮西達也氏の「サカサかぞく」シリーズのタイトルで、全て「サカサかぞくの～」に始まる三部作です。タイトルだけで笑えます。「トマト」のように、上から読んでも下から読んでも同じことばを「さかさことば」と言い、上から読んでも下から読んでも同じ文を回文といいます[8]。

シリーズの第１作は、原始時代の「サカサかぞく」の妻が「だんながなんだ」「さいていさ」と家出をすると、「ひるもくもるひ」「つまをまつ」家族の元に不気味な「とおいおと」が聞こえ、「たいてきがきていた」のです[9]。ストーリーすべてが回文になっていて、宮西氏の、ことばを紡ぎ出す技術や日本語力に感服してしまいます。回文絵本は、宮西氏とほるぷ出版の編集者との二人三脚で創作され、また、読者からの公募も採用されていることが、あとがきで明かされています[9]。

ことば遊び絵本を読んで大いに笑って楽しみながら、しかし、その創作過程を想像すると敬服しますし、楽しい創作物を届けてくれる作者に感謝の気持ちも生まれます。

本連載「ことば遊び絵本の魅力　その１」でも紹介しました、回文ブームの火付け役となった2000年初版発行の『まさかさかさま』シリーズは、イラストレーター・グラフィックデザイナーとして、さかさ絵とさかさ文字を研究している伊藤文人氏が作者とあって、ことばと同じくらい、もしくはことば以上にイラストでも楽しめる文字通り「絵本」です。

『まさか さかさま』
伊藤 文人 さかさ絵・文
（新風舎）

第２作の表紙（上）には「ゆうひがしずむ おかのうえ くるひもくるひも ろうへいし ラッパをふいてくらしてる」[10] と書かれ、緑の帽子を被り、へんてこりんな服を着た男爵のような人がラッパを吹いている絵です。この絵本をひっくり返すと、「アシスタントの クラウンに ぼうえんきょうを ささえさせやちょうかんさつする がくしゃ」[10] の文字が目に入り、ピエロに持たせた望遠鏡をのぞき込みながら、何やらメモを取る男の人の絵に早変わりです（上記表紙画像をさかさまにして見て下さい）。

シリーズすべての絵本で本文がこのような展開ですので、本をさかさにしたり、戻したりと回転させながら楽しむ絵本ですが、そのうちに、どっちに読み進んでいるのか分からなくなってきます。そんなことも含めて大いに遊べます。

シリーズは７冊刊行されましたが、出版社の倒産で絶版となりました。それを2008年にサンマーク出版から内容はそのままで、タイトルを変えて復刊され、再び楽しむ機会を与えられた貴重な絵本です。

ビブリオベイビー Bibli O Baby

連絡先　福岡市南区大橋 3-2-1 2F
絵本と図鑑の親子ライブラリー　ビブリオキッズ
TEL 092-557-3272　URL http://bibliokids.jp

E-mail
安藤：bibliokids.baby1@gmail.com
濱野：hamano@genkigawaku.com
木須：nobuokisu@gmail.com

まだまだあります！　アナグラム

「かばのさら・ばらのかさ」[11]

これは、１年前に出版された石津ちひろ氏のことば遊び絵本のタイトルで、またまた深化したユーモアあふれることばに広がりを見せてくれています。タイトルの上に小さく「もじのじゅんばん ならべかえ」と記されています。これを「アナグラム」といい、「日本語を並べ替えて別の単語や文を作ることば遊び」[12]です。

「かばのさら」と「ばらのかさ」は、同じ５文字を並べ替えただけなのに、全く意味の違うものになります。遊び心いっぱいの楽しいことば遊びで、テレビのクイズ番組などでもよく使用されていることを思い出される方もおられると思います。

このアナグラムを絵本にしたのですから、これがまたことばと絵が重なり合って、楽しさが何十倍にも広がります。高畠純氏の絵により、バレエの格好をしたカバが左手にバラのかさ、右手には重ねられた皿を持って、とぼけた表情の表紙絵だけで笑いがこみ上げてきます。

遊んで、語彙力！

２回にわたって「ことば遊び絵本の魅力」をお伝えしてきましたが、なぞかけや早口ことば、判じ物など、ことば遊びの魅力を紹介できなかったものもあります。それだけ、奥が深いということです。

ことば遊びは、大人の脳を柔軟にしてくれますし、子どもたちには日本語ならではのことばのおもしろさを楽しみながら、語彙を獲得していくという付加価値がたくさんあります。

日本語学者の齋藤孝氏は、著書『語彙力こそが教養である』で、「語彙とは『教養』そのものである」ことを主張しています。そして「その『教養』は、会話の表現力や説明力に直結し、一瞬にして自分の知的レベルを映し出す」と言うのです[13]。ＳＮＳが発達した現在、ともすれば、目の前にいながらにして声によることばを用いないで会話をしている若者をみかけることがあります。これでは語彙力の低下を招きかねません。日本に生まれて、美しい日本語を主言語として生きる子どもたちに、日本語の魅力をたくさん伝え、豊富な語彙力を獲得してもらうために、小さな頃からのことば遊び絵本は、何にも替え難いツールです。何せ、遊びなのですから。それは大人も同様で、正しく美しい日本語を日々、改め直していく積み重ねは、日本語力を高めていくことになります。歯科医院で、子どもたちや保護者の方へ、美しい日本語での会話の一役に、ぜひとも「ことば遊び絵本」をフル活用して下さい。

文献

1）西田良子：ことばの絵本（In 鳥越信 編：シリーズ日本の文学史４ はじめて学ぶ日本の絵本史Ⅲ），ミネルヴァ書房，京都，2002, pp.317-326.
2）たるいしまこ：あいうえおおきなだいふくだ，福音館書店，東京，2011.
3）金田一秀穂 監修：日本語力をきたえることばあそび②，フレーベル館，東京，2011, pp.20-23.
4）中川李枝子，山脇百合子：なぞなぞえほん　１のまき，福音館書店，東京，1988, pp.1-2.
5）角野栄子 作，長谷川義史 絵：なぞなぞあそびえほん，のら書店，東京，2009, pp.10-11.
6）右田ユミ：一九九〇年代の絵本（In 鳥越信 編：シリーズ日本の文学史４ はじめて学ぶ日本の絵本史Ⅲ），ミネルヴァ書房，京都，2002, pp.213-214.
7）石津ちひろ 作，スズキコージ 絵：なぞなぞおめでとう，偕成社，東京，2011, p.2.
8）金田一秀穂 監修：日本語力をきたえることばあそび③ フレーベル館，東京，2011, pp.10-13.
9）宮西達也：サカサかぞくのだんなしぶいぶしなんだ，ほるぷ出版，東京，2011.
10）伊藤文人：まさかさかさま その２，新風舎，東京，2000.
11）石津ちひろ ことば，高畠純 え：かばのさら・ばらのかさ，ポプラ社，東京，2016.
12）小野恭靖：ことばあそびへの招待，新典社，2008, pp.97-108.
13）齋藤孝：語彙力こそが教養である，KADOKAWA，東京，2015.